

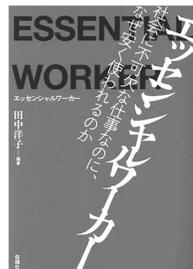
田中 洋子 編著

『エッセンシャルワーカー』
 ——社会に不可欠な仕事なのに、なぜ安く使われるのか

今野 晴貴
 (NPO 法人 POSSE 代表理事)

新型コロナウイルスの感染拡大の中で、私たちの当たり前前の生活を支える労働者たちを指す「エッセンシャルワーカー」の用語は急速に人口に膾炙するようになった。しかし、本書の編著者である田中洋子氏は、私たちは彼らの労働の実際について知っているようでほとんど知らず、日本においては彼らの低処遇状態が「当たり前」となっているという。そこで本書はまず、エッセンシャルワーカーについての類型を示したうえで、①それぞれの業種の働き方を現場に即した形で明らかにし、また、②いつから、どのように彼らの働き方が悪化したのか検証する。そして、③日本と産業・就業構造が類似するドイツにおける同業種と比較することによって、現在とは異なる働き方が可能であることを描き出すとする。

第Ⅰ部では主婦パートに支えられるスーパーマーケット、学生アルバイトが担う飲食チェーン店の実態が示される。これらの産業では非正規雇用が大規模に利用されてきたが、公正な処遇が不在である一方で過剰な責任が負われている。第Ⅱ部では、予算削減で進む非正規化が進む公共サービスについて、自治体相談支援、保育園、学校、ごみ収集の労働を題材に実態が示される。第Ⅲ部では、労働者の自主性に依存した病院の看護、介護の労働現場の過酷さが描き出される。そして第Ⅳ部では、自営業者として業務を請け負う中で、中間搾取や厳しい価格競争を強いられ処遇が悪化している運送、建設工事、アニメーション制作の労働者たちの実態が示されている。最後に、第Ⅴ部ではこれらを踏まえ、同



●旬報社
 2023年10月刊
 A5判・400頁
 定価2750円(本体2500円)

●たなか・ようこ
 筑波大学人文社会科学系教授

一労働・同一賃金などドイツ型の雇用政策の導入や日本に特徴的な重層下請け構造の解消など、具体的な政策案が提示される。

以上のように、本書は「エッセンシャルワーカー」の実態を暴き出し、あるべき社会政策を提示している。とはいえ、私見では、本書にはそれ以上の示唆がある。上記の作業を通じ、新しい階級社会の断層をも描き出しているからだ。本書を通読して理解できるのは、「エッセンシャルワーカー」が徹底した管理と削減の対象にされてきたということである。それは、予算や報酬、人員の削減だけにとどまらない。ケア労働に典型的にみられるように、「効率化」のために労働者に負荷を強いると同時に、労働（つまりはサービス）の質をも犠牲にし、仕事内容への誇りや労働者としての尊厳さえも毀損してきたのである。

編著者は、序章においてデヴィッド・グレーバーを引用しながら「人々に便益をもたらす、社会的価値があるほど、それに与えられる報酬はより少なくなる。その反対に、無意味で他者の便益にならない労働ほど報酬が高くなる。仕事の社会的価値と支払われる報酬との間には、「倒錯した関係」がある」（9頁）と指摘する。「ブルシット・ジョブ」とは、直接的に他者や社会に役立つものではなく、処遇は高いが従事者自身が「くそどうでもいい」と考える仕事であり、海外の世論調査では4割前後にも及ぶという。上記の「効率化」を推進した労働管理の担い手たちや、彼らが奉仕する経営層も、グレーバー

の言う「ブルシット・ジョブ」に該当する場合が少なくないだろう。彼ら自身は誰かのために労働するのではなく、エッセンシャルワーカーを管理し、あるいは削減することで高給を得るからだ。

このような「エッセンシャルワーカー」と「ブルシット・ジョブ」の対立構造には、新たな階級意識形成の潜在力が見て取れる。かつてエドワード・P. トムソンは『イングランド労働者階級の形成』において、「経験を同じくする結果、自分たちの利害のアイデンティティを、自分たち同士で、また自分たちとは異なる（通常は敵対する）利害をもつほ

かの人びとに対抗するかたちで感じとってはっきりと表明するときに、階級は生じる」（12頁）と述べた。「エッセンシャルワーカー」という語には、このような共通体験が凝縮して表現されているように思える。

実際に、本書は研究者だけではなく、エッセンシャルワーカーとして働く読者を多く獲得しているようだ。「エッセンシャルワーカー」は政策論争の用語であると同時に、新たに労働者のアイデンティティを結節する言説となるのかもしれない。